

# 「<sup>まず</sup>貧しい人々の生活を知ってもらいたい」 社会問題に取り組んだ活動家

よこやま げんのすけ  
横山 源之助



## 貧しい人々へのまなざし

「いやだ、いやだ…」

ある宿で、仕事のつらさを歌う声が、**横山源之助**さんの耳に入ってきました。

声の主は、12歳から15歳ぐらいの3人の少女たちでした。工場などで働く人たちの生活を調べていた源之助さんは、彼女たちに話しかけました。

「親もとは、どこかね」

「富山の山奥にある、森石山(もりいしやま)宇奈月(うなづき)周辺の村です」

「富山が、なつかしいなあ。でも、どうして、ここにいるんだい？」

源之助さんの澄んだ優しい目に安心した少女たちは、口々に話し始めました。

「工場(こうじょう)で働(はたら)けば、ええおべ(着物)を着て、給金(きんぎん)もたんともらえるからと言われていたのに…。聞いていた話と全然(ぜんぜん)違(ちが)うんです」



こんなにも多くの人々が  
貧しさに苦しんでいるとは！  
世の中に改善(かいぜん)を訴(こっ)えるためにも  
自分が見たことや聞いたことを  
伝えなければならぬ。

明治時代の日本は、産業(さんぎょう)が発達(はつたつ)していったけれど、貧しい人々もたくさんいたんだ。

源之助さんは、どうして貧しい人々の様子を調べたのかしら？

横山源之助さんは、貧しい人々の様子をくわしく調べて、本を書いた人だよ。

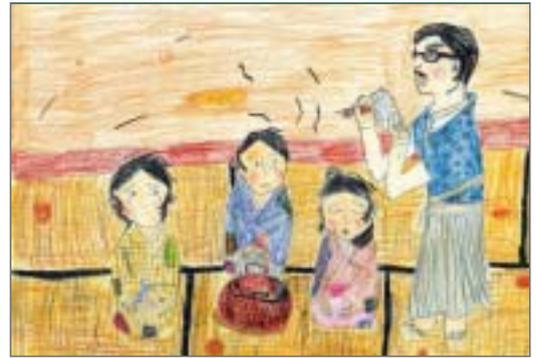


「ご飯(ごはん)は、米と麦の混ぜたものばかり。毎日、朝は暗いうちから、夜は10時ごろまで働いて、仕事を間違(まちが)いと叱(しか)られたり、棒(ぼう)で叩(たた)かれたりするんです」

横山源之助さんの三二年表		
西暦	年齢	
1871年		魚津町（現在の魚津市）に生まれる。生まれてすぐに左官職人横山伝兵衛の養子となる
1882年	11歳	小学校を卒業し、醤油問屋沢田家に奉公する
1886年	15歳	友人と弁護士になろうと上京する
1887年	16歳	英吉利法律学校（現在の中央大学）に入学するが、後に弁護士試験に失敗する。二葉亭四迷の影響を受け、貧しい人々の生活に関心をもつ
1894年	23歳	横浜毎日新聞社に入社し、記事を発表する
1899年	28歳	『日本の下層社会』を書き上げる。健康を害して、いったん魚津へ帰る
1912年	41歳	移民の様子を調べるために、ブラジルへ渡る
1915年	44歳	亡くなる



源之助さんが毎日新聞に執筆した記事。



少女たちの話を聞く源之助さん。  
(魚津市立上野方小学校6年 三日市桜さん)

「たまに、ふるさとから訪ねてくる人があっても、めったに会わせてもらえないんです。私たち、とうとう我慢しきれなくなつて、逃げ出してきたの。ああ、ふるさとへ帰りたい！」  
少女たちは、幼さの残る顔で、源之助さんに必死に訴えました。

このころ、北陸や東北の農漁村では、不景気と貧しさのために、女の子のほとんどは、小学校さえ満足に行けず、製糸工場などへ働きに出されたり、奉公に出されたりしていたのです。

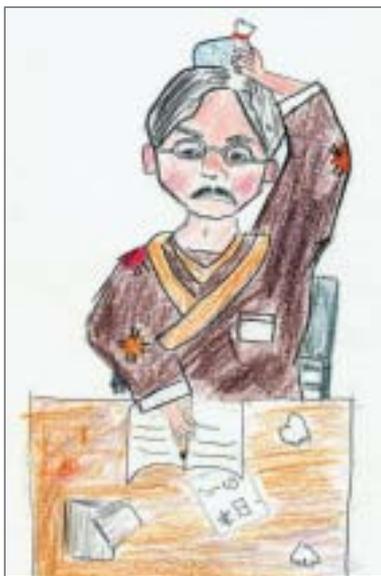
源之助さんは、腕を組んだまま考えました。こんな少女たちがいることを、ほとんどの人が知らない。世間には、自分の暮らしさえ良ければいいという人が、なんと多いことか。  
源之助さんは、考えれば考えるほど、腹立たしくなってきました。

誰かがくわしく調べて、原因を探り出さなければならぬ。世の中に改善を訴えなければならぬ。

その仕事を自分の手でやろうと決心した源之助さんは、毎日足を棒のようにして歩き、見たり聞いたりしたことを書き記していきました。

### 一葉亭四迷との出会い

源之助さんが誰もしようとしないう、貧しい人々の



貧しい人々の記事を書く源之助さん。  
(魚津市立上野方小学校6年 尾崎ひろ子さん)

研究をするようになったのには理由がありました。源之助さん自身、ふるさとの魚津でも、東京へ出てからも、苦しい生活を送っていたのです。  
また、小説家である二葉亭四迷との出会いも、源之助さんに大きな影響を与えました。  
「先生、昔に比べて日本の社会は発展しているのに、実際には、多くの人々が、貧しい暮らしを送っています」  
「横山君、多くの人々を貧しい生活から救い出すのが真の政治であり、道徳というものでしょう。そのために、人々の心をゆり動かす文学が必要なのです」  
源之助さんは、この小説家に興味と尊敬を覚え、何度も語り合ったり、一緒に貧しい人々を訪ねたりしました。  
あるとき、源之助さんは、貧しい人々を題材にした小説を書くことを勧められました。  
ところが、書き始めてみたものの、筆は思うようには進みませんでした。貧しい人々を救いたいという思いが強すぎて、失敗してしまつたのです。  
ダメだ、自分には小説など書けない。



山奥の村の発展に努めた  
教育者

山崎 兵蔵



横山源之助さんのように、山崎兵蔵さんも、助けを必要とする人々に尽くした先輩です。

兵蔵さんは、福光町から15km以上も山奥に入ったところにある、太美山小学校刀利分校（現在の刀利ダムの辺り）の先生を、55年間も務めた人です。

しかし、学校といっても、最初は壊れかけた小屋のようなところで、兵蔵さんが来たときには、机もいすも黒板もありませんでした。

兵蔵さんは子どもたちと一緒に、黒板や机、いすなど必要なものを作ったり、自分の給料の中からオルガンや謄写版（印刷の機械）などを買ったりました。

「いい先生が来てくれて、よかつたなあ」子どもたちが顔を輝かせて学校の話をしているを見て、村の大人たちも大喜びしました。

また、大人のためにも、さまざまな活動をおこしました。青年団や婦人会を立ち上げて一緒に活動したり、道路の整備をしたり、炭作りや養蚕など村が活気づくような活動をはじめたりしたのです。

このように、兵蔵さんはずっと刀利分校で過ごし、村の発展のために尽くしました。

源之助さんが思い悩んでいたそのとき、今度は、新聞社の記者にならないかという誘いがありました。「よし、小説ではなく、現実の世界をありのまま書こう。ペンの力で世間に訴え、多くの人に読んでもらうんだ」  
こうして、源之助さんは、横浜毎日新聞社に入社し、記者となりました。

### 自分の信じる道を行く

新聞記者になった源之助さんは、鋭い感覚で社会の様子を見つめ、それまで日本にはなかった新しい分野を開きました。それは、貧しい生活をしている下積みの人々に焦点をあてたものでした。

戦争中も、源之助さんは、戦争のせいで人々が悲惨な暮らしをしていると訴える記事を書き続けました。

「言論とは、信じていることや、真実を書けばいいんだ！」

戦争を批判する人がほとんどいない時代に、源之助さんは自分に言い聞かせ、自分の思うままに記事を書きました。

源之助さんは、精力的に各地を歩き回り、細かい数値やさまざまな統計とともに、小作農民や工場で働く人々の様子を発表しました。

### 『日本の下層社会』の誕生

「これまでの調査をまとめて、一冊の本にしませんか。費用は何とか準備します」



源之助さんをたたえた石碑。  
(魚津市新金屋公園内を見学した魚津市立上野方小学校6年の石崎清信さん、窪田光晶さん、中村香澄さん、林豊さん、不破啓輔さん、向井祥吾さん)



『日本の下層社会』を書き上げた後、源之助さんは体調を崩し、魚津市内の心運坊で静養しました。



源之助さんの記事 : 「戦争と地方労作者」という報告は、6回にわたり新聞に掲載されました。これは、戦争に苦しむ庶民の生活を見れば、戦争の真実が分かるという独特な記事でした。

子どもたちの感想

魚津市立上野方小学校6年生のお友達の感想です。

源之助さんは、人の気持ちを考える優しい人だなあと思いました。源之助さんは、世間にはお金持ちばかりじゃなく、貧しい人たちもたくさんいることを世の中に教えてくれたと思います。

この『日本の下層社会』は、貧しかった源之助さんだから書けた本だと思いました。(伊藤多紀さん)

女工の人たちは、11歳くらいから働いていると知りびっくりしました。今でいう私たちです。私たちは普通に学校へ行って、普通にご飯を食べているけど、そのころは全然普通じゃなかったんだなああとあらためて思いました。私は、一度『日本の下層社会』を読んでみたいなあと思いました。(大江亜季さん)

私が源之助さんの話を聞いて、一番初めに思ったことは、この時代がとても貧しいということでした。また、源之助さんの職業にかける熱意はすごいと思いました。源之助さんのことをもっと詳しく知りたいと思いました。(南塚蘭琳さん)



魚津市立上野方小学校5年 長勢美里さん

「私の調査が、本になる!」  
それは、源之助さんにとつて、思いがけない申し出でした。

源之助さんの心の奥に、喜びがこみ上げてきました。本になると、今までの調査の資料をすべて生かせるぞ。それに、たくさんの人に読んでもらえることになる。

「そうだな、本の題名は『日本の下層社会』としたらどうでしょう」

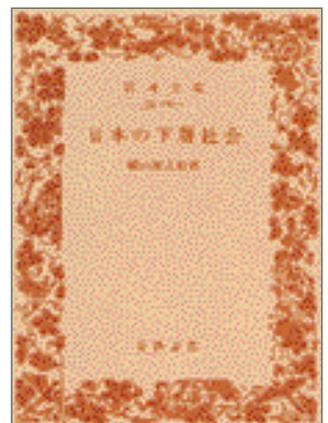
「うむ、『日本の下層社会』か...」  
悪くない。堂々とした書名だ!

源之助さんはさらに調査を重ね、貧しい生活の中で文章を書き続けました。そして1899(明治32)年、『日本の下層社会』が発行されたのです。

28歳のときのことでした。

源之助さんの本は、その後、社会に問題を投げかけました。政府も調査に乗り出して、貧しい人々に目を向けるようになったのです。

こうして、源之助さんは、ついにペンの力で人々の心を動かしたのでした。



源之助さんが書いた『日本の下層社会』

残念ながら、人々は源之助さんが亡くなった後に、その仕事のすばらしさに気づいたんだ。



でも、源之助さんは志を果たしたのだから、すごいと思うな。



源之助さんは、ずっと貧しい人々の味方だったのね。



横山源之助さんが貧しい人々のために力を尽くしたように、幼い子どもたちに愛情を注いだのが、次のページで紹介する亜武楽マーガレットさんです。